

## SPFラット室のラットに見られた間質性肺炎

田島 優、鍵山壮一郎、桂智映子、愛原勝巳、岡本 明、黒澤 努

大阪大学医学部附属動物実験施設

【背景】実験動物生産施設で *Pasteurella pneumotropica*(P.p)様細菌による汚染事故が発生したことが報告された。この P.p 様細菌の病原性を確認するため、本菌による汚染が確認されたコロニーから大阪大学医学部附属動物実験施設に導入していた WKY ラットを用い、菌分離と病理組織学的検索を行った。その結果、この菌は肺からは分離されなかった。しかし、同時に行った肺の病理組織学的検索では感染症を示唆する血管周囲に細胞浸潤を伴う炎症像が認められた。そこで、本症の原因病原体を検索したので報告する。

【方法】用いた動物は日本チャールスリバー社から3週齢で当施設の SPF ラット室に導入し、2ヶ月以上飼育した の WKY ラット 10 匹を用いた。菌の分離にはチョコレート寒天培地を用い右上葉の割面を培地に直接スタンプし、48時間好気培養した。ウイルスやマイコプラズマに対する血清反応は10倍希釈血清を検査機関に送付し検査を依頼した。肺の病理組織標本は左葉を10%中性ホルマリンで固定し、当施設で定法に従って H&E 染色後、鏡検した。PIV - 型ウイルスに対する抗体検査は日本チャールスリバー社に依頼した。*Pneumocystis carinii* (P.c) 検出のための PCR は当施設で実施し、プライマー pAZ102-E、pAZ102-H を用い、テンプレートとして肺右上葉の乳剤から UltraClean Microbial DNA Isolation Kit (MO BIO Laboratory Inc.) を用いて抽出した DNA を使用した。

【結果と考察】肺の肉眼所見はどの個体も異常は認められなかったが、病理組織学的には細胞浸潤を含む炎症像は7匹に認められた。肺からは P.p 様細菌を含む菌は分離されなかった。抗体検査では、M.p、HVJ、SDAV、HFRS、*Clostridium piliforme*、PIV - のいずれに対する抗体も検出されなかった。P.c に対する PCR の結果、10匹中8匹から 346bp の特異産物が検出された。

P.c は免疫学的に正常な動物には感染しないとこれまででは考えられていた。しかし、今回の PCR の結果から、観察された血管周囲への細胞浸潤は P.c 感染による可能性が示唆された。